

A photograph of a man with dark hair, wearing a light-colored t-shirt with red text and blue jeans, sitting on the roots of a large tree. He is looking towards the camera. To his right, a small, white, dog-like cartoon character wearing a brown hat and a red tie is sitting on the ground. The background shows a grassy field and a city skyline in the distance under a bright sky.

アンドの旅行記

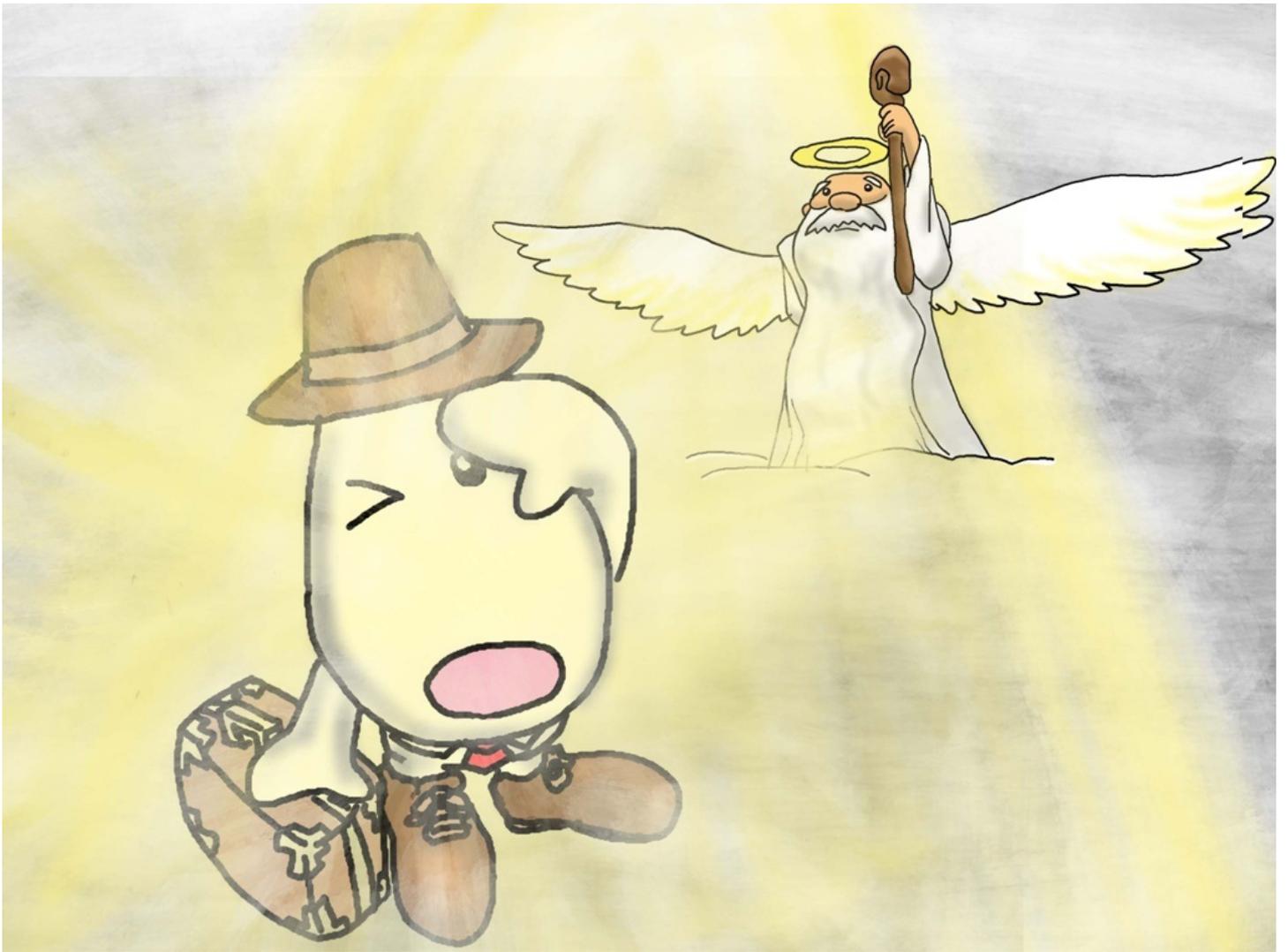
さく にしざからいと



アンドは絵本の神様をお願いごとをしました。

「神様お願いします。僕を絵本の世界から出してください」

神様は驚きました。そんな願いは聞いたこともなかったからです。



神様は言いました。

「外の世界は危険がいっぱいで危ないからよしなさい」

アンドは答えました。

「どうしても外の世界を見たいんです」

神様はため息をつきました。そして仕方がないというふうに杖をあげました。

すると光に包まれて、アンドはうっすらと消えてゆきました。



気がつくと、アンドは朝の光につつまれていました。

「ここはどこだろう？」

じーじじじじ、じーじじじじ。

遠くから蝉の声が聞こえてきます。



絵本の持ち主がいびきをかいて寝ていました。

なんてだらしない人なのでしょう。

お酒の臭いもしてきます。

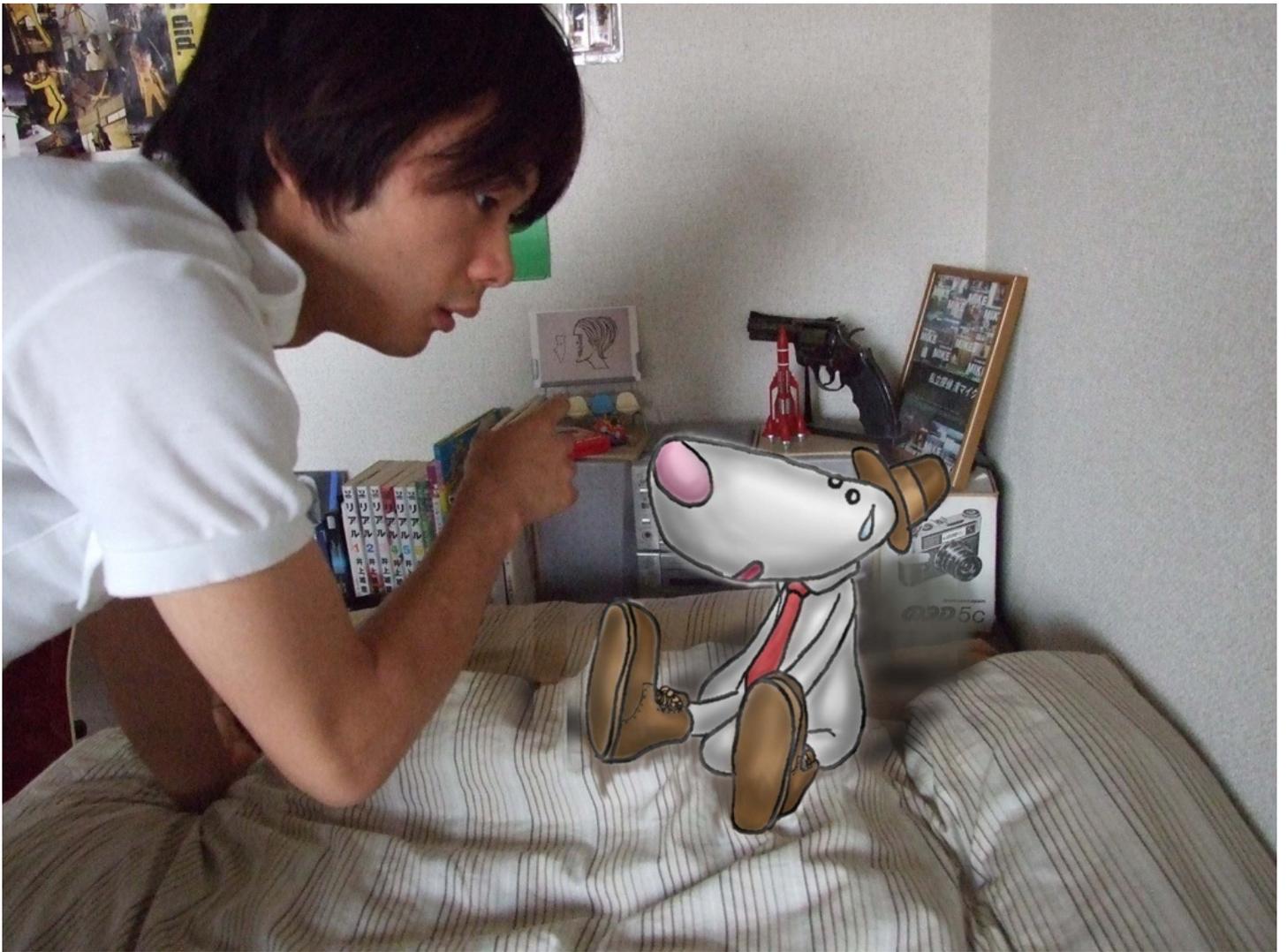
アンドは、この部屋の中を探検してみることにしました。



大きな箱のボタンを押すと

そこからは心地よい音楽が流れだしました。

アンドはその音色にうっとりしてしまいました。



「ふわ～あ。あれ、なんで音楽ついてんだろ？」

絵本の持ち主が目を覚まして、こちらにやってきました。

「ん？なんだこれ？」

絵本の持ち主はアンドに気付きました。

「こ、こんにちわ！・・・僕はアンド！絵本の世界から来たんだ」



絵本の持ち主は驚きました。

しばらくの間、口をあんぐり開けたまま目をぱちぱちさせていました。

そこに、ピンポンというチャイムが聞こえて来ました。

ピンポン、ピンポン、ピンポン。

絵本の持ち主ははっとして、部屋から出て行きました。

しばらくして、絵本の持ち主が部屋へ戻ると

アンドの姿はどこにもありませんでした。

「あれ・・・。やっぱり夢だったのかな？」

その頃、アンドは街を探検していました。

アンドは小さなブーツをコツコツと鳴らして歩きます。

さあ、どんな事が待っているんだろう。

アンドの胸は期待でいっぱいです。































アンドはふと気が付きました。

「今晚どこに泊まろう・・・」

この世界には知っている人が一人もいませんでした。

アンドは寂しくなりました。

□

「おーい！・・・アンド？」

アンドはびっくりしてしまいました。

絵本の持ち主がアンドを探していたのです。

□

アンドは尋ねました。

「どうして探しに来てくれたの？」

絵本の持ち主は少し照れくさそうに答えました。

「おまえが夢じゃなかったら・・・なんだか良いなと思ったんだ」

絵本の持ち主は、りょうた という名前だと教えてくれました。

アンドはりょうたに色々なことを教わりました。

例えば、この花火。

もっと大きな”打ち上げ花火”という花火もあるといいます。

アンドはあまりの美しさに目をぱっちりさせて感激していました。

でもなぜか、りょうたは悲しい顔をしています。

□

アンドは尋ねました。

「花火がこんなに綺麗なのに、りょうたはどうして悲しい顔をしているの？」

りょうたは少し微笑みました。

でもまたすぐに、悲しそうな顔になってしまいました。

アンドとりょうたは夜がふけるまで花火を楽しみました。

りょうたの家で、アンドはたくさんの本に出会いました。

本はとてもいいものでした。

りょうたに本を読んでもらったアンドはびっくりの連続です。

りょうたの顔から、少し寂しさが消えたような気がしました。

「素敵な場所を見に行かないか？」

りょうたはアンドを連れ出しました。

さあ、電車に乗ってどこへ行くのでしょうか。













日が暮れるまで、二人は砂浜に寝転んで空を眺めていました。

贅沢な時間が終わろうとしています。

二人の心は、とても満たされていました。



家へ帰ると、りょうたはギターを弾きはじめました。

それは素晴らしい音色でした。

「俺・・・もう一度音楽でやってみるよ。アンド」

アンドは目を閉じて、音楽に耳をかたむけました。

しばらくして、アンドの体が突然光りに包まれました。

「そうか、時間なんだ・・・」

アンドは神様に許された時間が迫っている事をりょうたに話しました。

驚いていたりょうたですが、最後は残念そうに大きくうなずきました。

「さよならりょうた。ありがとう」

□

「アンド・・・。俺、やけになって大切な人を傷つけたんだ。

今更遅いかもしれないけれど、謝ってみようと思うよ。

ありがとな。アンド」

りょうたは少しだけ笑いました。

もう、悲しい顔はしていませんでした。

おしまい